

一誠は救世主

ハラパンダ像

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは主人公の一誠が持つ赤龍帝の力を神様転生によって転生者に奪われ、一誠の人生が激変するお話

目次

プロローグ	1
プロローグ2	11
新たな関係	19
旅立ち	26
閑話	37
主人公&キャラ設定	40
ヒロイン達との出会い	
朱乃との出会い	45
アーシアとの出会い	55
猫又姉妹との出会い	74
セラフオルーとの出会い	89

グレイフィアとの出会い	106
閑話	118

プロローグ

「……もう、誰も信じない。」

一人の少年は、そう心で呟いた。

とある雨の降る日、まだ7歳位の少年が道を歩いていた。

少年はわからなかった。

自分だけは何故、憎まれ何故、認めてもらえないのかと。

少年には兄がいた。

兄は何でも出来た頭が良く駆けっこではいつも一番、周りの人もお父さんもお母さんも兄がかわいいと思っっているからだ。

それに引き換え自分は頭はそんなに良くはないし、駆けっこはいつもビリ、周りや子供たちからもいつも馬鹿にさせていた。

兄からも「お前なんか俺の弟じゃない。」と言われ、拳句の果てにお父さんとお母さん

からも「お前なんかわたしたちの子供じゃない！ 出ていけ！」とその言葉を前に少年の頭の中が真っ白になり、家を飛び出して少年は走り出した。

そして、雨が降り雷が鳴り少年の小幅が段々小さくなり雷の光が少年の顔を照らして、その眼には、溢れん涙が止まらなかつた。

そして、少年はとある神社に辿りつき雨を凌ぐ為、神社の神に御参りしてから屋根に入らせてもらった。

しかし、雨は凌げても体は満たされる事はない。

グウ

「お腹空いたな……」

少年は家を飛び出して、半日以上も何も食べていなかった。

少年は意識が朦朧とするなかで「神様つて、本当に居るのかな？」と心の中でそう思った。

そして、少年は束なつた縄を見て立ち上がり、それを持って歩きだした。

「……………」がいく。」

少年は小さな祠が祀られている池に辿り着いた。

その回りには岩や木があり、木の枝も岩に乗れば、子供でも届きそうだった。

そう、少年は首を吊るつもりだった。

「……………」これでやっと、悪い夢から覚めれるんだ。」

そう言つて、少年は木に縄を掛け輪を作り首にかけ最後に涙を流して。

「……………」神様がいるなら、こんな僕でも救つてください……………」

…つと、その時だった。

「何考えてんだ——！！？」

突然、後ろから声がして大柄な男が走って来て、左手で少年の背中を掴み首から縄を取り地面に降ろした。

「まったく、ガキが命を粗末にするんじゃないか!!?」

「ゴツホゴツホ……なんで……助けたんだよ……。」

「はあ? お前が呼んだからに決まってるだろ。」

その言葉を前に少年は「えっ?」と思考が停止した。

「僕が? いつ? おじさんを?」

「おじさ、まあいいか、子供言う事くらい。俺は須佐能ノ命いわゆる神様だ。」

「神様なの?」

そうは言っても、とても神様には見えなかった。

姿はまるで熊のように大きく毛ぶたくて服はボロボロの浴衣のようで、お腹も出ているのでとても神様には見えなかった。

「おじさん……本当に神様なの？」

「なんだよ！ 俺を疑っているのか？」

「だって神様で、白い布みたいな服を着ていて杖を持って、白い髭を生やしているんじゃないの？」

「あはははははこいつはいい！ そりゃ、いつの時代だ？ 言っておくがそれは西洋の神であって、俺は日本の神だ！」

「日本の神様！」

「ところでお前！ なんで首なんか吊ろうとしてたんだ？」

少年は突然、現れた須佐能にすべてを話した。

「成程なく、捨てられたから死んでやると思ったわけか。」

そうやって、須佐能は後ろを向き『ギュツ!』と拳を握りしめ「ふざけるなー!」と叫び、次の瞬間、目の前の岩を粉々にカチ割った。

「それでも家族かよー!!? 小僧!!? 今からそいつらに殴り込みだ!!? 場所はどこだ!!?」

「まってよ! おじさん!」

少年は須佐能を止めるようと手をパーにした。

「なんでだよ! お前等、家族なんじゃないのか?」

「殴り込み行ったからって何も変わらないよ。そもそも僕と兄さんは違いすぎたんだ。兄さんは優秀で僕は精々落ちこぼれだ。お父さんもお母さんも僕より兄さんの方が良いに決まってるんだ。」

地面に膝をつき両手をつけて、目を逸らし暗い顔をして少年は須佐能に語りかけた。それを見ていた須佐能は又、拳を握りしめてこう言った。

「よし！ 分かった！ お前の人生、今日から俺が守る。」

「ど…どういう事。」

「簡単な話さ。 お前も神の仲間入りをするんだよ！」

少年は須佐能が何を言っているか理解できず、10秒位してから立ち上がって話かけた。

「それって神様になれるってこと？ でも、人間の僕がなれるの？」

「なぐに、初めは神になるために修行をし力を付けてからだ。」

「本当に僕が神様なれるの？」

…つと思つたらいきなり右膝で地面をつき、それを見た須佐能は心配するかのよう
に少年に駆け寄った。

「ど…どうした具合でも悪いのか？」

グウ

「じ……実は家を飛び出してから何も食べてないんです…」

「ぶっ！ あははははは…はあ…わかったわかった向こうの世界へ行ったら、うまい物
腹いっぱい食わしてやるよ。」

向こうの世界って、一体何!?

「その向こうの世界で天国の事? 僕、死んじゃうの?」

「ははは、おもしろい小僧だな。安心しろ、神々が住まう世界だ。そういえば、まだ名前を聞いてしなかつたな。小僧、名前は?」

「僕は一誠です!」

そう言つて、一誠は須佐能と共に神々の住まう世界へ向かつた。

此処は本来、主人公になるはずの一誠の住む兵頭家ですが、その家の一つ部屋から不気味な笑い声が聞こえてきます。

「ククク♪ やつと出て行つたな。これでこの世界のヒロイン達はみんな俺のもんだ

！」

実は一誠の兄は異世界から来た神によって転生させてもらい、一誠から赤龍帝の力を奪い一誠の兄になったのだ。

神に一誠の存在を消してもらおうとしたが、それは叶わず仕方なく邪魔な一誠を消そうと悪知恵を働かせ、ついに一誠を追い出すに成功した。

「交通事故で死んじゃったがとんだ『棚からぼた餅』だぜ。まさか『ハイスクールD×D』の世界に転生できるとはな。これでリアスや朱乃やアーシア、他のヒロイン達はみんな俺のものだ！」

とそんな事を考えている最低なクズは放って置いて、これは一誠が赤龍帝ではなく他の龍の力を得るお話です。

つづく

プロローグ 2

ここは日本の神話大勢が住まう世界、つまり人間の世界ではありません。

そこには美しい桜の木があり、花が満開に咲いており、建物まで立派でまるで三国志出てくるかのようなお屋敷が建っていて、地面には芝が生え日差しが照らされています。

そこには二人の親子のような人影が見えました。

「よし、今日はここまでにしよう一誠！」

「そうだね。須佐能。」

そう、その二人こそが一誠と須佐能だった。

「それにしても、ここへ来てたった数カ月でよくここまで強くなったな!!」

「須佐能の教え方がいいからだよ。」

「へへへ、嬉しいことを言ってくれるじゃねえか弟子よ!!」

「ホントの事だって、師匠！」

須佐能は照れているようで指で鼻の下をこすいだ。

そこへ、二人の美女が現れた。

「はいはい、修業はそこまでよ！」

「一誠、次はお勉強の時間よ。」

「うん、分かっているよ。天照さん、月読さん。」

その二人は天照と月読で須佐能と同じ日本の神様なのだ。

二人は絶世の美女でスタイル抜群な上に胸もあり得ない位に大きく、傍から見たらモデルか女優にしか見えなかった。

ちなみに天照さんは青い髪のスレートロングヘアで眼がパツチリしていて、一誠の事をいつもやさしい顔をして見つめている。

そして、月読さんは茶髪で天照さんと同じスレートロングヘアだけど、何故か眼を閉じている。

歩く時も普通に歩いてしてるが誰かにぶつかる事もなく何でなのかはわからない。

きつと、修業すれば僕もできるようになると思つていた。

「おいおい、今日位はいいじゃねえか。一日位勉強しなくたって死ぬわけじゃないんだからよ。」

そこへ、須佐能の師匠が割り込んできた。

だが、そこへ天照さんと月読さんが師匠の前に出た。

「ダメです!!? 子供は小さい頃から勉強が大事なんですから!!? 体だけ鍛えればいいわけではありません!!?」

「そうよ! あなたのような下品で筋肉ダルマのようになってほしくないの!」

「き…筋肉ダルマって? お前らな…。」

そう言つて二人は一誠を連れて行き、本がズラくと並んだ棚のある部屋に行き。

天照は一誠を膝の上に乗せ椅子に座り両手で一誠を抱きかかえる。

月読は横に立ち本を持ち読み始め眼は閉じたままなのになんで『読めるのかな』と不思議に思つていた。

その光景はまるで小さい弟に勉強を教える二人のやさしい姉のようだった。

だが、初めからそうだったわけではない。

あれは一誠が須佐能と初めてここへ来た時の事だった。

「ちよつと須佐能、何よ。そこ子？」

「あああ、俺の弟子だ!!？」

「はあ〜？」

須佐能は一誠と出会った事、一誠がどういう人生を送って来たかを包み隠さず二人に話した。

そして…

「なるほどねえ〜…ひどい話じゃない。」

「それでホントに家族と言えるんですか？」

「俺だって認めたくはない認めたくないが、今の日本の人間の世界は少なくともそうらし〜。」

そう言つて、須佐能は両手をギユウツ!!?と握りしめた。

「わかりました。認めましょう!」

「私もお手伝いしましょう!」

「おおおー! そう来なくちやな!」

そして、二人は須佐能の後ろに隠れている一誠に声をかけようとする。

「はじめて、私は天照大御神といいます。」

「私は月読の命です。どうぞお見知りおきを。」

二人はそう言つて、一誠に手を差し伸べる。

そして、一誠は恥ずかしがり屋ながらも勇気を出して、二人の前に出て挨拶をした。

「初めまして、僕は一誠です。」

一誠が挨拶をすると二人は手を頬に当てて顔を赤くしていた。

「まあ、礼儀正しい子ね。」

「それにどことなく、かわいいわね。私の恋人にしちやおうかしら。」

「ずるいわよ、私の旦那様にするのお。」

「あら！ 決めるのは一誠くんの気持ち聞いてからよ。ねえ、一誠くんはどつちがいい？」

そう言われて一誠は真つ直ぐな視線で口から出た答えは。

「どつちかなんて選べませんよ。二人のようなすぐ綺麗で美人なお姉さん達ですから。」

「き……綺麗！」

「美人な……お姉さん！」

その一言で二人揃って顔が真つ赤になり、鼻血は風水のように吹き出し、二人は同時に倒れ込み気絶した。

それを見ていた須佐能は頭をかきながら。

「おいおい！ 子供の言う事で大げさな。」

「須佐能のおじさん、この人達、大丈夫なの？」

一誠は二人を心配して須佐能に聞く。

「なぐに、うれしくてただ気絶しているだけだよ。」

実は二人は『神』である為、今まで『恋』や『恋愛』などを経験したことがないのだ。先ほどの一誠の一言で二人のハートは『ドストストライク』に決まった。

この時から二人は一誠にゾッコンになった。

そして、話は戻り一誠が天照と月読と勉強していると突然、須佐能の師匠が部屋へ入ってきた。

「一誠はいるか？」

「師匠！」

「なんですか！ 今は勉強の時間ですよ。」

突然、部屋に入って来た師匠に月読さんが怒鳴る。

「それどころじゃない！ イザナギ様とイザナミ様が一誠をお呼びだぞ！」

「えっ 父上様と母上様が！」

この時、いきなりの師匠の口から出た言葉に、一誠は何がなんだか分からずにいた。

つづく

新たな関係

ここは日本神話の大者達が集まる神聖な場所の大広間、とは言つてもたった6人しかいないが。

そこには祭壇のような立派な椅子に座つた和服を着た男性と眼鏡をかけ豊満な胸をした女性が立っていた。

その祭壇の下で膝ま付いている子供とその後ろに立つ男女三人がいた。

その祭壇の二人はイザナギとイザナミで、膝を付いている子供は一誠、三人は須佐能と天照と月読だった。

そして、イザナギが一誠に声をかける。

「よう！ 一誠！ よく来たな！」

「はい、父上様、母上様！」

そう、二人は今は一誠の親なのだ。

「ハハハハハ!!? こんなオヤジを父上様か!!? 相変わらず、かわいい奴だな。お前は!!?」

そういうとイザナギは笑い出し、一誠に姿勢を崩せと他愛のない雑談を始めた。

そして、その隅に立っていたイザナミが腰のあたりで一誠に小さく手を振る。

それに反応した一誠も小さく手を振っていた。

それを見たイザナミは『ポツ』と頬が赤くなり一誠に微笑んだ。

このイザナミは一誠を実の息子以上に溺愛している。

その理由は一誠がここへ来て一カ月が経ち、一人で寝ていると真夜中に目が覚めてトイレに行こうとすると怖くて動けなくなった。

いくら何でもまだ子供、本当なら親と暮らすのが当然なのに天照と月読と一緒に寝ればいいが、須佐能は二人が一誠を襲いそうなので『待った!』をかけるが、かと言って須佐能はイビキが五月蠅いので却下、結局一誠一人で寝ることになった。

一誠は須佐能や天照や月読に助けを呼ぼうとするが子供の声では、三人の部屋までは届かず、一誠は泣き出し両親の事を思い出してしまった。

そうしていると部屋のドアが開き、一誠は警戒して『だれ!!?』と言い、一人の美し

い女性が入って来た。

「何じゃ、子供ではないか？ そなた、ここで何をしておる？」

「あ……あなたこそ、だれですか？」

「わらわはイザナミじゃ！」

突然のことで、どうしていいかわからない一誠はとりあえず、自分の名前と自分が須佐能と出会いここに来た理由と今の状況を話した。

「成る程、親に捨てられ死のうとしたところを須佐能と出会い、神になる修行の為此にいるという訳か……。」

「……はう。」

一誠は涙ながらにイザナミに自分の事を話して両手で寝巻を掴み途方にくれていた。その時、イザナミが一誠を泣きながら抱きしめた。

「な……何？」

「苦しかったじやろ……、辛かったじやろ……、まだ小さな子供を捨てるなど……、考えられぬ事じや……、しかし、安心せい今日からわらわが一誠の母じや！」

イザナミは両手で一誠の頬を抑えて自分が母だと視聴した。

「ほ……本当に?？」

「あああ、お主はもうわらわの子じやぞ♪ 何をしてほしい♪ とりあえず一緒に寝てやろうか?」

「そ……それはうれしいけど。その……さ……先にトイレに。」

そして、無事にトイレを終えて二人は一緒に寝る。

翌朝、イザナミはイザナギに一誠は自分達の子供だと宣言した。

イザナギはしぶしぶ了承したが満更でもないようだった。

なんでも二人は夫婦のようだが別居しているそうでイザナギの浮気の所為らしく、そんなこんなで一誠はイザナギとイザナミの子供になることとなった。

先ず、須佐能が武芸の指南役、天照と月読が学業の教師、イザナミが母親兼お世話役、

イザナギが父親だ。

それよりも一誠はある事を考えていた。

それは神様は裸で寝るものなのかと。

なぜ、そんなことを考えるかというところ、イザナミが一誠と寝る時、着ている服を脱いで裸になった。

「なんで、脱ぐの?」

「何を言っているのじゃ? 寝る時は裸じゃろ? 服を着るのは人前で肌をさらさない為、天照や月読も裸で寝ているぞ。」

「ふ……一人も寝る時は裸なの? えっ? じゃあ、須佐能の師匠も?」

「いや、それは女性だけじゃ。妙なことは考えるな。さあ、もう寝るとするかの。」

一誠は『ふう〜』と落ち着いた様子で布団に入り、イザナミと一緒に寝た。
ところが…

「あ……あの〜…」

「ん? どうした?」

「その…胸で締め付けられて苦しんですけど？」

そうイザナミは天照と月読に勝るとも劣らないスタイル抜群の美女。

その中でも胸は『これでもか!』というくらいの一丁も超えるかのような爆乳だった。

「あああ、すまんすまん。そなたがあまりに愛らしいので思わず抱き締めたくなくなりましたのじゃ。」

そうして、イザナミは一誠を自分の目線に来るようにして二人は眠りについた。

話は戻り、イザナギの一言で場の空気が一転した。

「一誠、異世界に行ってくれ！」

う
う
う
へ

旅立ち

イザナギは一誠にある一言を告げたことで場の空気が変わった。

「一誠！異世界へ行ってくれ！」

突然のことに一誠だけではなく、須佐能や天照と月読もショックを隠せなかった。

「ち、父上様！」

「なんだ？」

「異世界へ行けとは、何故ですか？」

「お前の為なんだ！ 一誠！」

一誠は理由を聞くとイザナギはそう答えるが。

「一誠！　ワシの見たところ、お前には素質があるからだ！」

「素質？」

「そうだ！　ここへ来てまだ数カ月だというのに、お前はメキメキと腕をあげ須佐能の修行にも付いて行っておる。お前の力を伸ばすという意味でも必要な事なんだ。」

「……、分かりました！　父上様！」

一誠とイザナギは父と息子との誓いの場で須佐能は少し寂しいようであった。
しかし、天照と月読は…

「ちよつと、待ってください!!？」

「ん？　どうした？」

天照と月読が叫ぶとイザナギは反応した。

そして、二人は…

「イザナギ様、いくら何でもまだ早すぎます!!？」

「そうです！　一誠はまだ幼過ぎまし異世界に放り出すなんてあんまりです!!？」

天照と月読は一誠の事を心配してイザナギに抗議する。

「いいや、放り出すとは言っていないさ。一誠はいずれ帰って来るさ！」

「どういう事ですか？」

「つまり、一誠に異世界に転移できる能力ちからを与え、異世界へ行き世せの中を平和したら、こつち世界へ戻って来るという訳だ。」

イザナギの大間かな説明が通じたかはわからないが、それでも。

「ですが、やはり危険が突き舞う事には違いありません！」

「そうです。イザナミ様も何とか言って下さい！」

「御黙りなさい!!？」

天照と月読がイザナミに助けを求めるといきなり、イザナミは二人に怒鳴り黙り込んだ。
だ。

そして、一誠も。

「母上様？」

「い…一誠！ わらわだつて辛いのですよお！ 大事な息子を知らない世界に送り出さなければならぬだなんて……」

イザナミは袖を目に当てて、一誠にまるで許しを請うかのように泣きながら話した。

「最初はわらわだつて、これを聞いた時は胸が張り裂けそうになり反対したのですが…でも、いずれ神になるであろう一誠には遅く育つてほしいのじゃ… 本当の事を言えば、ずっと側においておきたい…」

「母上様！」

「今は母上でなく、日本神話のイザナミとして言います！ 異世界へ行き、そこで困っている人々や世界を平和にし、この世界へ戻つて来なさい！」

「はい、イザナミ様！」

イザナミは涙を払い除け、日本神話の神イザナミとして一誠を説得したが、やはり天照と月読は駄々をこねているようで、その夜、二人は一誠の布団に潜入した。

しかも、裸で。

「あ……あの……何をしているんですか？」

「一誠との最後の夜かもしれないしい♪」

「私達の処女をもらってえ〜♪」

二人はそう言つて、一誠を真ん中にして布団に入ると何やら入口から禍禍しい妖氣のようなものが出ていることに築き、そこにはイザナミが。

「なくにくをやっているのだ!!? 貴様らう!!?」

「イザナミ様!!? こ……これは!!?」

暗闇から眼鏡を『キラツ』させながら現れたは、イザナミは口がつり上がりこつちを見ていた。

だが…

「み……見れば分かるではないですか? 夜這いですよ!」

「あ……あなたねえー」

「ほーう、肝がすわったなあー？ お主！」

イザナミに怯えていた月読と違い、天照はイザナミに正面から向き合った。

「天照よ!?？ いつからわらわにそういう口を聞くようになった!?？」

「無礼を承知で言いますが、私は一誠が好きです！」

「な……なんじゃと？」

「わ……私もです！」

天照と月読は布団から飛び出し、裸のままイザナミに抗議した。

「貴様等、どういうつもりじゃ!?？」

「そのままの意味ですよ！ 私達は真剣なんです！」

「一誠が異世界へ行ってしまうと言われて黙ってられますか！」

二人は両手で拳を握り締めるとイザナミは鳴き始めた。

「グッスン………わ……わらわだつて、一誠と別れるのがどれだけ辛いと思っっている。だから……せめて今日ぐらいはこの胸に『ギユツ』と抱き締めながら眠りたいのじゃ……」

その後、三人は話し合いで一誠を入れて四人で寝ることにしたのだった。

ちなみに、天照と月読は左右にイザナミは一誠を胸に抱いて仰向けになり真ん中になつた。

首の下にたわわで豊富な胸に左右にもこれ見よがしにデカデカな胸が待ち構える。それを見ていた一誠はこれから自分はおっぱいの世界に行くのかと不安だった。

翌日、再び一誠はイザナギと対話し、イザナギから異世界に行くための能力を与えられ、イザナミと天照と月読、そして須佐能も広間に集まっていた。

「一誠よ！　これからお前は異世界へ行く訳だが、案内する人達を紹介するぞ！」
「人達？」

イザナギは一誠に異世界の案内人を紹介すると言い、そこへ着物を着た男女の二人が入って来た。

「はじめまして、拙者h：『カバだ！』だ：誰がカバだ？ 拙者は柳生やぎゅう 志場理しばりと申す者でござる！」

「アチシハ、ヒメコダ♪」

その二人の内の一人は、まるでカバが二足歩行しているようで髭を生やし、刀を腰に据えていた所謂侍だ。

そして、もう一人は背が低くえらいハイテーションな女の子だった。

「あなた達は異世界の人、何ですか？」

「左様、貴殿に我らの世界n：、しかし、見たところまだ子供、大丈夫でござるか？ イザナギ殿？」

異世界からやって来た志場理という侍は、一誠を見て少し不安になり、イザナギに相談したが当然である。

一誠はまだ幼い子供、誰だって不安になる。しかし。

「心配するな。一誠の実力はワシが保証する。」

「そ…そうでござるか？　ゴツホン、先程は失礼した許してほしい。実は私達の

世界は今、大変なんじゃ！」

「大変？」

侍は一誠に謝罪すると自分達の世界で起きている事を話した。

なんでも、進歩界シンブカイというところで神と魔族が戦い、創怪山ソウカイザンという7つの怪創、つまり、ケーキやアイスのように3段とから段だとかいう段に分かれた世界で、その一番上にある第7怪創に親玉がいるそうなんだ。

そして、志場理は一誠に一本の剣を渡した。

「あのく、これ何ですか？」

「それは進歩界に伝わる宝剣刀竜剣とうりゅうけんじゃ！」

「刀竜剣！」

「それには進歩界の勇者龍神丸リユウジンマルの力が宿っているのだ！」

「龍神丸？」

一誠は志場理から進歩界はその昔、神と魔族が争い創怪山に魔の手が襲い人々が苦しめられていた。

それを救ったのが勇者龍神丸だった。

しかし、魔族は倒された訳ではなく魔界に封印されただけだったのだ。

その時、勇者龍神丸も力尽き最後の力を剣に封印し死んだそうだ。

そして、年月が経ち魔界の封印が解け魔族が復活した。

それが志場理の言っている敵のようだ。

それを聞いて一誠は……

「僕は行くよ！　　異世界だろうと宇宙の果てだろうと平和にしてみせる！」

こうして、一誠は決意を固めイザナギとイザナミ、天照と月読、それから須佐能の師匠に別れを告げ異世界へ旅立った。

つ
づ
く

閑話

異世界の進歩界へ行った一誠は、そこでたくさんの人々と出会い話し時には戯れることもあり自分が知らなかつた事もあり、楽しい時苦しい時うれしい時つらい時困った時もあった。どうしていいか分からない時は仲間に頼れと教えられ人との？がりが大切な事だと知った。

ところで異世界から来た柳生志場理から渡された刀竜剣を使い、一誠は勇者龍神丸の力を借りて、その身に白と赤と青の鎧を纏い金と赤の甲冑カウチユウを被り勇者に変身して敵を倒して行き、創怪山を上がっていく度にその怪創を統べる星神せいじんに出会い心が通じ合い、その証に星神の力を宿した勾玉まがたまを貰い一誠の体の中に消えていった。

何でも、その勾玉は一誠の心で繋がっていてなくならない所か一誠以外は使えないそうだ。

そのおかげで一誠は立ちはだかる強敵を倒して行き、それに始めは敵だった者とも心が通じ合えば仲間慣れるものだということも覚え、いつの間にか5人もの大切な親友が出来ていた。

そして、この異世界に來た一番の理由でもある敵の親玉と最後の戦いに一誠達は勝利

した。最後の戦いで一誠は刀竜剣の中にある勇者龍神丸の魂と対話し、『シヨウネンヨ、オヌシノ、ココロ、シカトウケトツタゾ！ ヤイバヲモツテ、マヲカルノデハナク、ココロデマヲウツ！ ソノココロ、ケツシテワスレルナ、一誠！』最後に龍神丸は名前で呼んでくれた事を一誠は忘れなかった。

戦いは終わり刀竜剣を返そうとしたら、それはもうお主の物だと志場理が言い出した。元々異世界の物だから返さなくてはならないと思っていたがこの世界の神に仕える『天竜師様』が『それはもはやそなたの物、いえ、そなたにしか扱えない代物』だと言ってきて、更にはこの世界に再び平和をもたらしてくれた事を称え、『戦辺 一誠』と名を貰い、一誠も了承し進歩界の人々と別れを告げ自分の世界に帰って行った。

その後、一誠は他にも自分が知らない異世界に転移して、その世界の事やその世界の人々の事など種族や争いの事などを知り、異世界の魔法や能力、武術などを学ぶべく修行の旅へ出た。

『忍びの者』という異世界で忍衆や忍術の修行をさせてもらい特殊な目を入れたり、『美食屋と呼ばれる人々が未知なる食材を求めて探求する』という異世界で調理法やノッキングという技の修行もし、『食べると不思議な能力を得る実がある海賊の世』という異世界で剣術と武術、覇気という修行もさせてもらい、仲良くなった友に自分の世界

の事を話すと自分をその世界に連れていってくれと頼まれてイザナギに確認を取って
良いそうだ。

『7つの玉、集めし時、竜が現れる』という異世界で武術や気の修行をさせてもらい、
その世界の科学者が一誠の世界に行ってみたいと言いついて承知した。ある異世界で
は『エルフやドワーフの世界』や『魔法や万能回復薬の世界』などもあり、異世界の技
術や知識を自分の世界に広めようと一誠はあることを考えていた。それは、○×△□で
す！

主人公&キャラ設定

主人公：戦刃 一誠

性別：男

歳：（最初は7才で原作からは17歳）

種族：神族（半分人間）

性格：シリアスで女性に優しく間違いを正す

能力：力竜剣（龍神丸の姿をした所謂鎧を纏う訳だ）、覇気、気、魔法、忍術、万華鏡

写輪眼（スサノオ）

武術（技）：六式、剣術、ノックング

幼い時に家族から捨てられ自殺しようとしたところで神と出会い、神にならないかと誘われそのなり行きで神の子供になった。異世界に行ける能力を与えられ力や魔法、剣、武術、などを学び修行をさせてもらい、後に異世界と共有出来る組織を立ち上げる。ちなみに髪は黒髪で筋肉質ではあるがスタイルは細マッチョ！そして寝る時は裸だ。（イザナミと一緒に寝るようになってから裸で寝る習慣になったそうだ。だが異世界では気を付けていた。）

イザナギ

性別：男

種族：神（日本神話）

性格：女にだらしないが人を導く事に長けている。

一誠の父親役。いつもやる気の無さそうな顔しているが日本神話のトップ役の一人である。

イメージ……（境界線上のホライゾン↓酒井・忠次）

イザナミ

性別：女

種族：神（日本神話）

3サイズ（B110/W65/H97）

性格：真面目で愛情深い

一誠の母親役。髪は青色で膝まであるロングヘアでいつも眼鏡を掛けている。一誠を異常なまでに溺愛している。一誠と初めてで出会った時、あまりにもかわいい顔をしていたのでつい抱き締めたくて仕方がないのだ。ちなみに、お世話役で時には膝枕で耳掃

除をする。(寝る時は裸で一誠と一緒に寝るときもそうだ。)

イメージ……………(境界線上のホライゾン↓フアナ)

天照

性別：女

種族：神(日本神話)

3サイズ(B107/W63/H95)

性格：おっとり系で優しい

髪は青色で膝まであるロングヘアで目がパッチリ開いていて、一誠と出会ってからハートを射ぬかれてドストライク！ちなみに、学門と一般常識を教える教師役。一誠の花嫁を狙っている。(寝るときは裸だ。)

イメージ……………(境界線上のホライゾン↓浅間・智)

月読

性別：女

種族：神(日本神話)

性格：清楚でおしとやか

3サイズ（B106/W63/H95）

髪は茶色で膝まであるロングヘアでいつも目を閉じたまま、一誠と出会ってからハートを射ぬかれてゾッコン！ちなみに学門の教師役。一誠との結婚を狙っている。（寝るときは裸だ。）

イメージ……（境界線上のホライゾン↓葵・喜美）

須佐能

性別：男

種族：神（日本神話）

性格：体育会系で酒好き

一誠の指南役で師匠。一誠と初めて会ったとき神にならないかと誘った。

イメージは筋肉質で格闘系、顎に髭を蓄え酒瓶を肩にぶら下げ袖が破れた柔道着を着ている感じ。

兵藤

誠二

性別：男

種族：人間（原作からは転生悪魔）

性格：自分勝手に短気、己のことしか考えない

能力：神器（ブーステット・ギア）

神様転生によつて『ハイスクールD×D』の世界に転生して兵藤家の兄なり、一誠から赤龍帝の力を奪い家から一誠を追い出して自分が主人公になろうとする転生者である。髪は茶髪。

イメージ：（原作の一誠より下品で変態）

ヒロイン達との出会い

朱乃との出会い

相変わらず、一誠は異世界を歩き来しては修行や勉強の毎日、ところが日本神話のイザナギの命令で人間界に出向くことになり、忍者の異世界で学んだ木の枝を飛んで異動の応用で電柱の上を飛んでいた。

〈一誠 side〉

「やれやれ！　いくら父上様の御使いだからといっても、こんな格好で大丈夫かな？」

そう、今の俺の格好は野球帽を被りバンダナで口元を隠し、傍はたから見ると不審者と間違えられてもおかしくない。

それもこれも父上様が……

「いいか、一誠よ。　悪魔や墮天使がどこに潜んでいるか分からない。　お前の力欲し

さに襲って来ないとも限らん。 いざという時に備えて素顔を晒してはならんぞ！」

普段はやる気が無くとも、こういうところは父親だな。

「さて、御使いも済んだことだし帰る……『止めてください。』……、あれは？」

声がる方向へ視界を向けると神社の最上階に母親と幼い娘の親子がサングラスを掛け黒いスーツを着た数人の男共に囲まれていた。

「朱璃！ その魔物をこっちに渡すのだ！」

「いやです。この子は私がお腹を痛めて産んだ私の娘です。」

母親の方は子供を庇って、動こうとしないがスーツ男の奴等は。

「フン、所詮は魔物に魂を売った者に救いなどないだろう。 良いだろう！ お前もま

とめて死んでもらうさ！」

「ううー。」

スーツ男の一人が銃を取り出し銃口を親子に向ける。

パキッー

「だっ……誰だ！」

「おじさん達、弱い者いじめはダメだよ！」

俺は我慢できずに石で銃を弾いて姿を見せる。

「子供？」

「確かに見た目は子供だけど、間違った事を見過ごすほど子供じゃないよ！」

「小僧、運が悪かったな！　今、我々がやっている事を見てしまった以上、お前にも死んでもらうぞ！」

「それは、どっちかね？」

黒スーツの男達は俺に銃口を突き付けて一斉に発砲するが。

「ソル剃」

「き、消えた！」

「ぐあああああー。」

「ぐつ、へぶっー。」

ドカツバコツバキツボツカーン

海賊の異世界で壮絶な艱難かんなん辛苦しんくを乗り越えて来た所為か、覇氣の力もあり周りの人間が止まって見える。

倒れている黒スーツの男共は殴る蹴るなどで命に別状はない。

「ふう…、さて、帰るとするか。」

「待ってください。」

振り向くと話掛けて来たのは母親に抱き締められ震えていた同じ黒髪で浴衣を着た幼い女の子だった。

そして、後ろには母親もいた。

「ありがとう。本当にありがとう。」

「君のおかげで助かりました。なんてお礼を言ったらいいか？」

よく見ると可愛いし母親の方も美人だな。

「いいや、礼なんかいいよ。それに間違った事を正すのは当然だし。」

「……」

「あらあら〜♪」

俺が言った事に動揺したかわからないが女の子は頬は少し赤く染めていた。それを見ていた母親もクスリと微笑んでいた。

「それじゃあ、俺はこれで。」

「ま…待って！」

別れを告げて立ち去ろうとしたら手を捕まれた。

「まだ、何か用？」

「わ……私は姫島 朱乃……あなたの名前は？」

手を捕んだまま放そうとしない、朱乃は涙ぐんだ顔で俺に問う。

「……一誠、俺は一誠だ！」

「いつ……一誠。」

「名前なの？ 性は名字は無いの？ それになんで顔を隠しているの？」

朱乃に引き継いで母親も質問して来た。

「ごめんなさい……無いんです。」

「無い？」

「どうしてなの？」

「その……親に捨てられたんです……」

「!」

俺が漏らした一言で二人は固まり、そして、母親が質問した。

「ど……どうして、そんな？」

「それは……」

その時だった。

「あー!!? けー!!? のー!!?」

ドカッ!!

空からも凄い勢いで誰かが、俺にアッパーを食らわして近くにあった木にぶつかった。

「いつ…痛つてえ…」

「何者だー!!? 貴様!!? 私の家族に何をするつもりだ!!?」

そいつの背中には黒い翼が生えていたので墮天使だとすぐわかった。

「朱乃、朱璃。ケガは無かったか？」

「「バカツ——!!？」」

「なっ……なんだ……いきなり？」

「この子は、あっ!!？」

言い合いをやっている内に俺はその場をずらかることにした。

「い……居ない。うっ……うええええ……」

「あ……朱乃、なんで泣いているんだ？」

「あなた!!？ ちよつと、いいかしら!!？」

俺が居なくなつたと分かり、朱乃は大口を開けて大粒の涙を流し泣き出してしまい、墮天使は物凄い顔をした母親に耳が千切れるくらいに引つ張られ『痛つてて』と言いなから連れていかれた。

神社から少し離れた森の中で俺は心の中であの女の子、朱乃の事を思い浮かべていた。

「姫島朱乃か、縁があつたらまた会おうな。」

〈一誠 side out〉

一誠は一旦、休憩と回復薬を服用して殴られたところを回復してから、神の世界へ帰還し再び異世界へと冒険に旅立つ。

アーシアとの出会い

ある日、一誠は思いがけず興味本位で福引きを当てた。

家族で海外旅行行きの手ケットを入れて、それをイザナギとイザナミに見せたら、イザナミは行く気満々だった。イザナギは興味ない顔をしていた。

当然である神ならその気に慣れば世界一周どころか宇宙にだって行けるからだ。

だが、イザナミは一誠との旅行が楽しみでならないのだろ。

その話を聞き付けたか、天照と月読も飛び付いて来て須佐能はまあ、良いかという感じで皆で行く事になった。

〈一誠 side〉

ここは海外のとある町で、僕達は高級ホテルの最上階の超豪華なVIP部屋でくつろいでいた。

福引きで当てたチケツトは格安のボロホテルで母上様が激怒し、最終的にこのホテルになったわけだ。

「まったく、あんなボロホテルに何故、わらわ達が泊まらねばならぬのじゃ！」

「ええ、全くです。日本に帰ったら旅行会社を潰しに掛かりましょう！」

「いいえ、それでは生温いです。二度とそういう事が出来ないようにそういった人間を片っ端から、地獄に落としてはいかがでしょうか？」

母上様と天照さんと月読さんが盛り上がっている中、父上様と須佐能の師匠はため息吐いているが、僕は三人のところへ行き頭を下げた。

「ごめんなさい。」

「「「「「「「」」」」」」」」

僕がお辞儀をして謝ると母上様と天照さんと月読さんは黙り混み、ソファアーに座っていた父上様と師匠はこつちを向いた。

「僕が福引きなんか当てたから、母上様と天照さんと月読さんに嫌な思いさせちゃつて、ごめんなさい。」

その言葉に三人はハッと脳裏を過り、僕の側に寄り抱き抱えると言った。

「一誠が気にする事は無いのじゃよ！」

「そうそう、悪いのは人間の方なのですから。」

「それに一誠と旅行が出来るのは、本当に嬉しいのですからね♪」

母上様は謝罪しながら頭を優しく撫でてくれて、天照さんはハンカチで涙を拭いてくれて、月読さんはお菓子やケーキを渡してくれる。

場の空気が変わり観光に行こうとしたら、流石に着物姿では目立つと思い、スーツに着替えたが父上様は部屋で寝ていると言い5人で行く事になった。

ちなみに、僕は普段から着物ではないが。

日本を離れ初めて見る世界、色んな物に心奪われまくりだ。

そして、気が付くと僕だけどこだかわからない場所にいた。

好奇心に任せて歩き回った所為か、皆とはぐれてしまったようだ。

帰りたくても道が分からない。

人に聞こうにも言葉が通じない。

途方にくれていると教会の入口に辿り着いた。

まるで前に家を追い出されて神社で須佐能に出会った時を思い出した。

でも、そう都合の良い事が起こる筈がないと諦めていた時。

「あ……あの………」

「！」

突然、後ろから声がして振り向くと、そこには金髪でブロンドの可愛いシスターがいた。

「あ…、あの…」

「君、日本語がわかるの？」

「はい、観光やホームステイに来る人の中に日本人の人がいるのでその方に教わりました。」

これは思いも寄らない偶然か、まあいいか！

「初めまして、僕は一誠だ。よろしくな！」

「はい、私はアーシア・アルジェントと申します。」

天の救い、いや神の救いで助かったと実感し、その子にホテルの場所を聞こうと自分が教会から出たことがないので場所がわからないと言って来た。

仕方なく、彼女を通して教会の聖職者に聞き、なんとか場所が分かり一安心したが何か礼をしたいが何が良いか考えていると。

「あ…、あの…」

「ん、なんだ？」

「そ…その…私と…お友…達になっ…て、ください…ませんか？」

アーシアがモジモジしながら話掛けて来たので、気になったが彼女は友達欲しかったようだ。

話を聞く限りではアーシアは赤ちゃんの時に教会の入口の前に捨てられていたそう
だ。

そのまま教会の聖職者達に保護され、聖女として育てられたそうだが周りには、同じ位の年齢の子はなかなかいないそうだ。

「僕でいいなら友達になるけど、いいのか？」

「ほ…本当ですか!!？」

「うん！ 本当！」

「うっ…嬉しいですうー。」

アーシアはそう言って俺に泣き付き抱き締めて来た。

よほどに嬉しいかったんだろか、今まで周りは大人ばかりで一緒に遊んでくれる友達もいなかったのだから。

そうして、僕達は教会の外へ行き鬼ごっこや隠れんぼなど押しくらまんじゆう等、思いつく限りの遊びをした。

アーシアは初めての友達が出来た興奮で聖女服が汚れることも構わずに遊びつくし、後で聖職者に叱られたが落ち込むどころか笑っていた。

「あー！」

「大丈夫ですか、一誠さん？」

僕はうっかり転んで、足を擦りむいてしまった。

「チツ、やっちゃったな。」

「待って、下さい。」

アーシアが僕の足に手を翳すと光出し、怪我したところがみるみる治癒していく。

「あれ！　アーシア、なんだ今の？」

「ああ、私にもよく分からないのですが、きっと神がお与え下さったんだと思います。」

「どうやら魔法の類いではないようだが、それにしても異様だ。」

「なーあ、その力ってなんでも治せるのか？」

「はい！ 怪我や悪いところは大抵は誰でも。」

僕の脳裏にハッと何かが走った。

「あのさ、その力って人間以外にも使えるのか、例えば悪魔とかにも？」

「悪魔？ ああー、背中に蝙蝠のような羽が生えていますよね！」

「知ってるのか？」

「あの内緒なんですけど、前に傷付いた悪魔さんを治療したことがあるんです。」
「！」

悪魔を治療しただと？ 何て事だ!!？ 僕はアーシアの両腕を持ち。

「アーシア、その事を僕以外に知る者はいるのか？」

「え？ その悪魔さんと一誠さんだけですが何か？」

僕は内心、ホツとした。

もし、その場面を聖職者に見られていれば、アーシアは悪魔にたぶらかされた裏切り者だと教会から追放されていただろうな。

全くなんて、呑気な。

「アーシア、この事は二人だけの秘密だいいな！ それと不用意に誰でも治療するのはやめた方がいい。」

「え？ どうしてですか？ 折角、神がお与えになったのに。」

僕はアーシアと顔を近付け合った。

「いいか、アーシア！ 教会と悪魔は敵同士なんだ。もし、悪魔を治療している所を聖職者に見られていたら、お前は悪魔に加担した裏切り者として教会を追放されていたんだぞ！」

「そ……そんな……」

アーシアの顔は青ざめ口を手で押さえて下を向き、泣きじやくるだけだった。

「アーシア、お前が神に尽くしたいと望むのなら、僕も協力するよ！」
「え？」

アーシアは泣くのを止めて僕の顔を見上げた。

「アーシアに僕からのプレゼントだ！ 目を閉じろ。」
「プレゼント？」

アーシアは言う通りに目を閉じる。

僕は彼女のまぶたの上に手を置き魔法をかける。

異世界でエルフ族に魔術を教わり魔道師達からも魔法の指導を受けた。

そして、手を退けて：

「いいぞ、目を開けろ。」

「あの？、一体何をしたんですか？」

「アーシアに魔法を掛けたんだ。これでお前は誰を治療していいのかわかるようになった筈だ！」

アーシア自身も半信半疑で疑っていたが、町へ出て実験してみた。

「一誠さん、なんだかすごいです！」

「どうだ！ 感想は!?？」

「人一人に何か色が付いているように見えます…。」

アーシアに掛けた魔法は人の心を色で表して見せる魔法だ。

例えば、『良い人』心が綺麗なら色は清んでいる青、『悪い人』心が汚れていれば色は濃い黒、『いやらしい人』如何わしい心なら色は赤、『恋をする人』恋心なら色はピンクに見えるのだ。

それをアーシアに説明して、兎に角、黒と赤は駄目だと言い納得したようだ。

「アーシア、悪魔は絶対に信用しては駄目だぞ!!？」　これは友達としての約束だからな

!!?。」

「はい！ 約束です！」

「じゃあ、指きりだ！」

「ゆび？きり？」

指きりを知らないように教えた。

まあ、外国では無理ないかと思ひ僕達は指きりで誓いをたてる。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本のくまつす、ゆびきった♪」

「これで約束を破ったら針千本だぞ。」

「はっうー、針を飲むのはこわいです?。」

冗談半分のもりなんだが、怖がって怯える姿も可愛い気がした。

そして、日もくれそろそろホテルに帰ろうとした時。

「ん！ なんだ、この嫌な感じの気配は何かいるのか!？」

僕は様々な異世界へ行つて来たからわかる。

異世界には良い奴ばかりではない、当然良からぬ者もいる。

しかし、このどげつい感じは今まで最大だ。

十中八九悪魔だな。

僕はホテルに連絡して母上様方に悪魔を退治して帰ると電話し夜になるのを待った。

時間は夜の0時を回り、アーシアが就寝したのを確認し、僕は悪魔の気配を感じとり外の茂みに、何か潜んでいるのがわかりライトを照らす。

「おい、何者だ？ 出て、来いよ!!？」

「ククク、よくわかったねー！ でも、そつちから出向いてくれたのは好都合だったよ
♪」

茂みの中から出て来たのは、青い髪した10代くらいで僕とあまり変わらなかつたが、不気味な笑い声し口を吊り上げて金色の歪んだ目をしていた。

「初めまして、僕はディオドラ・アスタロト！　でも、君に用はないんだよ。　僕が用があるのはアーシアだけなんだからさく♪」

「お前か？　アーシアに怪我を治して貰った悪魔つてのは!!?」

「ああー、そうだよ！　そして、アーシアを僕のものにするんだー!!?」
「どういう事だ？」

僕が質問すると悪魔はペラペラと笑いながらいろいろ話してくれた。

自分の下衆な趣味、それは各地の有名な聖女やシスター達を言葉匠に騙して、教会を追放させて自分の眷属ものにし、最低辺まで堕ちたところを犯す、心身共に犯す最低な趣味を。

「それで僕をどうしたいんだ？」

「はあ？　惚けるんじゃないよ!!?　僕のアーシアと楽しそうにしてたじゃないか!!?」

笑うのを止め、俺を睨み付ける。

「友達だからな！　なんか文句あるかよ？」

「いらねえんだよおー!!?　アーシアは僕だけの物だ!!?　アーシアに近付くものは殺すからね!!?」

暴言をぶちまけた悪魔は手に魔力を貯めて俺に投げ付けるが。

「剃」

「あれ?　何処だ!!?」

「かー、めー!」

悪魔は僕が姿を消したことに動揺し、必死に辺りを見回す中、僕は異世界で気を操る修行をし、今ここで試して見る事にして、手に気を貯め構える。

しかし、これは力を貯めるのに時間がかかる上に同じ態勢を保ったままだから、戦闘では無防備になるので相手に隙がないと危ないが、この悪魔は戦闘経験が無さそうだから実験には丁度良いと思った。

「はー、めー!」

「えーい!!? 何処だ!!?」

業を煮やした悪魔が叫んだ。

そして、俺は悪魔の目の前に立ち。

突然、目の前に姿を現された事に動揺するディオドラだった。

「波あ——!!?」

ゴオオオオオオオオ——

「ギャアアアアアア——!!?」

僕は溜め込んでいた気を一気に砲出した事でディオドラに直撃し塵になった。

「フーウ、まだ慣れてないから体力の消耗が激しいな。」

何はともあれ、これでアーシアの危機は去ったわけだが、悪魔はアイツだけじゃない。それに他の聖女やシスターを自分の物にしようとするとは許せんな!

(よし、やっぱりやるしかないな!)

拳を握り締め心の内で誓い、かねてより考えていたあの計画を実行に移すと。

時間はあつという間に過ぎ去り、僕と家族は日本へ帰国することになり、アジアに別れを告げに行ったが。

「いやですう——！」

アジアは僕の腕を掴み、放そうとしない上に泣きじゃくる。

「クスツン　なんで…、折角…、お友達に…慣れたの…に…」

「アジア、よく聞くんだ。」

アーシアを抱き締め耳元で囁やく。

「わかったな。」

「ほ……本当ですか？」

アーシアは泣きじやくるのを止め僕の顔を合わせる。

「なんなら、また指きりするか？」

「はい！」

僕達は再び約束の誓いに指きりをした。

「約束だぞ！」

「はい。約束です！」

〈一誠 side out〉

そして、二人は再び出会うその日まで。

つづく

猫又姉妹との出会い

一誠は異世界の武術や剣術を学んで修行し自分の世界にそれらを広めるため、先ずは信頼のおける者達を集める必要があつた。もし、異世界の武術が悪用されれば世界征服や破滅の引き金になるとも限らないと一誠はその恐ろしさは誰よりも知っていたからだ。異世界の進歩界で正しき者がいれば悪しき者もいるという事実には直面したからだ。一誠は世界各地に出向き自分の目で見て声で話し人と触れ合い、誰を信じて誰が間違っているかを見極め、その中に悪魔や墮天使も混ざっているのも分かっていた。そうして、一誠は要約信じられる武術家達を見つけて来た。名前は塔城とうじょう 岩撤がんでつという武術家で道場持ちだが日本の山奥の掘つ建て小屋で看板に獵斬白と書かれたポロ道場だ。度々世界各地を放浪し世直しの旅に出向くらしい。貧しい難民の人々から違法な税金を取り立て、金や子供を奴隷に掛ける悪徳商法や政治家を抱き込み好き放題する悪党どもを懲らしめるが如何せんあまり効果は無いようだ。おそらく悪魔どもが糸を引いているのだろ。だが、そんな旅をしているから気の合う志の仲間が出来たらしい。一誠も拳を交えたから分かるこの人達なら信用出来そうなので先ずは自分の事、異世界の武術と悪魔や墮天使のことを少しずつ教える事にした。

〈一誠 side〉

いつも通り異世界の武術を皆に教え稽古や修行に明け暮れる毎日、フツとたまには山の方で一人で修行してみるかと思いい隣の山の方まで駆けやがって行った。

「フーウ たまには一人で鍛練するのも一興か。」

俺がそんな事を考えていると、何やら異様な気配がした。

「この感じ？ 悪魔か？」

直感だった以前、アーシア・アルジエントの時に出くわした悪魔と同じ気配がしたが、レベルはそんなんでもなかった気がする。

「まあー良い！兎に角行けば分かる！」

自信満々に気配を辿る方向へ行くと、黒髪と白い髪で着物を着た二人の少女と、背中に蝙蝠の翼を生やした三人の男共が走っていた。どうやら追われているようだが、しかし、あの二人は。

「待つて、逃げられんぞ！」

「はあはあ……待つてと言われて待つバカはいないにや!!」

「はあはあ……姉様……私……もう……限界です……。」

成る程、あの二人は頭に猫耳が付いているから人間ではなく妖怪、それも猫又か！異世界でも猫族や鳥獣、牙狼等の種族はいたからな。まして悪魔が存在しているなら妖怪もいて当たり前だ。さて、感想を言っている場合でなくてそろそろ助けに入るか!?

バタンツ

「もう……歩けません……。」

「白音ー、しっかりして！ あっ!?」

「ククク　とうとう追い詰めたぞ！」

走り続けて、遂に妹は倒れ込んでしまった。それに呼び掛ける姉は、追いかけて来た悪魔共から庇うように盾になった。

「心配しなくとも、二人纏めて我が主の眷属するために連れて行くから、怖がらずとも良いのだぞ！」

「はあー？ふざけるんじゃないにや！　私と白音にこんな酷いことしておいて、よく言えたものねえ!!？」

「フッフ　威勢が良いが状況はこちら側が有利なんだがな!!？」

既に無数傷を負っている姉妹、妹を庇う姉と笑いながら近づくと悪魔共、見るに堪えなかった。

「待ってえー！」
バシッ

「クウ、だ 誰だあー!」

猫又の姉妹達に近づく悪魔の一人に、石を投げつけ片目を潰した。

「おじさん達、コスプレなら秋葉かイベントにした方が良いでしょう!」

「ガキ?」

「子供だと思つてバカにすると死ぬよ! 言っておくけど実力は俺の方が上なんだよ。」

「何してるにや! 早く逃げるにやん!!?」

悪魔と会話していると、妹を庇っていた猫又の姉が叫んだ。

「そいつらは私達をここまで追い込んだのよ。子供が勝てるわけがないにやん!」

「ククク、まったくその通りだぞ! 運が悪かったな。でも、まあ俺様の片目の札に、貴様をなぶり物にさせて貰うがな。」

投げた石で片目を潰された悪魔は、俺にニヤリと笑い掛けた。

「待つにやー！ 私が言いなりになるにやん！だから、その子だけは！！」

「うるせえー！ お前たちは後回しだ！！ 先にこのクソガキの泣きわめく顔を拝まねえーと気が治まん！！？」

「そうだよ。 気持ちはありがたいが先にこいつらが先だ。」

姉の決意を仇あだにし、俺は悪魔共と対面し構える。

「ケツ！ いっちよ前に構えとは正義マンズごっこか？」

「子供が強がると怪我するぜ。 ギヤハハハ♪」

「ガキ！ どういうつもりかは知らんが、貴様の運もこれまでだな！？」

「その余裕いつまで続くかねえ？」

余裕しきっている悪魔三人は一斉にかかってくる。だが、しかし。

「荊」

「消えた……？？」

「……どこ どこだ？」

「逃げたか!!?」

「違う。ランキヤク嵐脚」

スツパ!!?

「……な　なんだ?」

悪魔の一人の視界が突然、右上と左下に流れていき悪魔は一刀両断になりそのまま絶命し、それを目の当たりした他の悪魔二人はぼう然となるが。

「き　貴様、舐めた真似をー!」

「待て　冷静に慣れー!」

「指銃シガン」

ズブツ!!?

逆ギレして向かって来た悪魔の額に指をねじ込み、そのまま白目で倒れ込んだ。

「クウ——」

「どうしたの？ 急に一人ぼっちになって寂しい!?？」

形勢が一気に逆転してしまい、片目を潰され一人残った悪魔は、歯を食い縛り猫又姉妹に一目散に走ったが。

「何処へ、行くの？」

「チツ」

追い詰められ人質にしようと思ったようだが、そんな考えが読めないでも思ったのか。俺は悪魔が振り返った瞬間から先に猫又の前に立っていた。

「な なあー、取引しないか？」

「何？」

急に態度を変えて話しかけて来た。

「こいつら、あの姉妹は猫又の中でも仙術が得意な猫シヨウの一族だ。もし、こいつらを

眷属にしたなら、悪魔世界の貴族は褒美をたんまり下さる勿論、我が主もだ。」

「それがどうした？」

「分からののか？ 金や名誉が手に入るのだぞ！」

所詮、悪魔は自分達だけか！

「くだらん！」

「何？」

「生かす価値も無いな。ここで殺す！」

「ひいひいひいッ」

ザツシユツ ドサツ！

嵐脚で首をはねて地面に落ち切り、離された胴体は倒れ込む。そして、呆然として戦いを見ていた猫又姉妹の所へ行った。

「大丈夫か？」

「……あ ああ……おかげで助かったにや……ありがとうにやん……。」

どことなくたどたどしい喋り方をしているが無理もない。あんな戦いを見せられた後では、そして俺は懐から出した豆を渡した。

「何これ？」

「これは仙豆といつてな。一粒食べるだけで腹が膨れるだけじゃなくて、怪我や体力も回復する不思議な豆なんだ。騙されたと思って食べてみる。」

黒髪の猫又は半信半疑な顔をしていた無理もない。今まで追われていた訳だし『騙されたと思って』て言われても、又騙されるのは嫌だろうが、でも。

パツクン カリカリ ゴツクン！

疑っていたようだが、他に信じられる人もいないから仕方なく、信じてみようと思っただようだ。

「あれ？ ウソでしょ？」

黒髪の猫又が急に立ち上った。

「体が軽いわ！ キズも治ってるしさつきまで空腹だったのに、すっかり体力も回復してるにゃん♪」

突然のことに驚きを隠せずにいた姉は浮かれていた。

「あのさつき？」

「え？ 何かにゃん♪」

はしやいでいた姉に気を失っている妹を指差すと。

「この子は良いのか？」

「あ 忘れてたにゃん♪？」

倒れていた妹を見た姉は我に帰り、妹の下へ行き仙豆を食べさせ体力を回復させた。そして、姉は頭を下げる。

「ありがとうにゃん！君には感謝して仕切れないにゃん！申し遅れたけど、私は猫又の黒歌にゃん♪ それでこっちは妹の白音♪」

「初めまして 白音です。」

倒れていた白い髪の子が意識を取り、戻し起き上がって挨拶をして来る。

「なんか訳ありのようだが、よければ話してくれないか？」

黒歌と白音は顔を合わせて、確認を取り全てを話した。何でも悪魔が猫又の力欲しさに猫又の里を襲撃し、若い猫又と子供は捕らえられ、年取りと反抗する者は殺され里は滅ぼされたそうだが、二人は隙を見て逃げ出したがさっきの追手に追われ逃げたそう。人間だけでは飽き足らず今度は妖怪まで悪魔という奴は！と、それはそうとこの二人はどうするか聞いてみると行くとこも宛も無いようだし。よし、決めた！

「お前ら、人間と暮らす気はあるか？」

「はい？」

俺は獬斬白に戻り事の事情を説明し、黒歌と白音をここに置いてはくれないかと頼んだら、心良く受け入れてくれた。黒歌と白音も初めは緊張と警戒していたが段々と会話するようになり、道場で稽古するようになり、白音は格闘技の筋が良いと岩撤が褒めていた。黒歌は格闘技ではなく仙術の修行を中心に組み組んでいるが、俺も異世界で学んだ仙術や武術を二人にも多少伝授した。だが、しばらくして俺は日本神話に呼び出しを受け、道場からしばらくいなくなると皆に言うと言った。黒歌と白音が俺の手を放さなかった。

「行かないでよおー!!??」

「離ればなれになるのは嫌にゃん!!??」

二人は駄々をこねて両腕をガードされ、その目から涙を流し動こうとしないが二人に言い聞かせる。

「黒歌!・白音! お前達はもう一人じゃない!!?? だつてこんなにたくさんの家族がいるじゃないか!!??」

俺が言い聞かせると二人は顔を上げて周りを見る。

「ここには岩撤だけじゃない。たくさんの家族や友達がいるじゃないか。それに帰って来ないとは言っていないだろ。」

そう獵斬白には、塔城 岩撤だけじゃなく他にも武術家がいるのだ。まずは、日本柔術家光悦寺 秋雨と中国拳法家馬 拳聖と空手家榊原 紫円とムエタイのアパチャイにくノ一の時雨さん、それから岩撤の娘の塔城 美優。

「これだけのあたたかい人達に囲まれているんだ。何かあつたら皆が守ってくれるし、お前達なら大丈夫だ。美憂と時雨なら同じ同姓だし相談してみろ。それともっと自分の力を信じろ！」

二人の手を取り握りしめて喝を入れる。

「はい！ わかりました。」

「約束にゃん！絶対帰って来るにゃん♪」

晴れ晴れとした笑顔を見せて、俺は獵斬白を後にした。

しかし、予想以上に帰る機会がなく結局、2年もの月日が流れてしまい獵斬白に行つたが、猫又の姉妹はそこにはもう居なかつた。

〈一誠 side out〉

つづく

セラフオールとの出会い

今回、一誠は現世、つまり人間界に御忍びでヒーローショーの会場でショーを観に来て人混みの中にいた。それは五才の頃、まだ家族に捨てられる前に両親に連れて来てもらった遊園地のヒーローショーが切っ掛けであった。一誠はその頃、目を輝かせて観たヒーローに憧れて自分もいつか、あんなカッコいいヒーローになりたいと思っていたからだ。

〈一誠side〉

やはり、ヒーローものはあつく燃えてこそだな！ 異世界では勇者や賢者が英雄、つまりヒーローなんだがこっちではアクシオンや戦隊ものが受けが良いようだし、魔法少女なんかもTVでやってるから、本当に魔法とかが使えるなら誤魔化す時に、番組の撮

影中とか言えば大丈夫かと思うがまだそこまでは至っていないからな。そんな事を考えていると女の人に声をかけられた。

「もしもし♪ ボク一人？ お父さんとはぐれちゃったの？」

なんだ！この人いきなり？ 見たところ警備員ではないようだが、黒髪ツインテールの女の人で年齢は17〜20代かな？しかし、何で魔法少女のコスプレなんだ？！

「ねえねえ♪ さつきから私のことジロジロ見てるけど、もしかして魔法少女に興味あるの♪」

いやいや、あんたが何故、魔法少女の格好をしているのか考えていたんだよ！！？ 兎に角、名前を聞かなくては。

「あの人？人にもものを探ねるときは、先ず自分から名乗るのが筋では？」

「あつごめんごめん♪ 私はセラフォルー支取 瀬良♪気軽にセラでいいよ♪！」

なんか!?? かるいような天真爛漫なような変わった人だな? まあ、こつちも名乗るところだが、流石に兵藤はまずい家を追い出され何年も経つから、迷子連絡されたら厄介だしな。そうだ!

「俺は一誠。 戦辺一誠だ!」

咄嗟に進歩界の『天竜師様』から頂いた名を名乗ると。

「うん♪ 戦辺一誠くんだね! わかったよ♪」

セラという女性は納得したようで、ニコニコしながら俺を見る。

「ところでなんで、そんな格好をしているんですか? ヒーローショーの関係者の人じゃないよね?」

「ああ♪ これは魔法少女3姉妹の1人光葉ミツハツチの衣装だけど♪」

へえ〜今の現世はそんなのが流行っているのか? まあ、人の趣味をどうこう言うつ

もりはないがなんでこんな所に？」

「あのくお姉さんはここで、そんな格好で何をやっているんですか？」

「ああ、実はね！ 知り合いと私達で妹達にヒーローと魔法少女シヨのクラブを見せるつもりが知合いとはぐれちゃったの！ どこにいるか分からなくて迷っている内に、遂なんとなくだけど君に声をかけてしまったの!?!？」

ヒーロー物と魔法少女ねえ？それはすごいが妹？家族で来ているのか。

「家族と来ているなら、ケータイで連絡を取ればいいんじゃない？」

「ダメダメ！ 今日、私達がここへ来ていることは妹達には秘密なの！ 突然、現れてビックリさせてあげたいんだもん♪」

そんなものかね？俺なんて、そこまでしてもらった事なんてないから理解は出来ないし、自分の兄からも攻められてばかりだったから、家族というものは半信半疑でわからないが、少なくとも母上様や父上様と天照さんや月読さんと須佐能の師匠と出会ってからは、家族の愛情は理解出来てるつもりだ。

「それじゃあ、これからどうするの？何処でやるか決めてないの？」

「ん～場所は知り合いが手配してくれてるから、妹達はもう着いてる筈なんだけど？知り合いのケータイにかけても繋がらないのよ!？」

おそらくケータイをどこかに置き忘れたか周り騒音がうるさくて聞こえないからだ。まあ、これだけの人混みだそう簡単に見つからないだろうが仕方なくセラの手を取る。

「あれ？ どうして手を掴むの？」

「決まってるだろ！一緒に探そう！」

俺は何の躊躇いも無しで、セラと手を繋ぎ歩き出した。

「あつ でもヒーローショー観ていたんじゃないの？」

咄嗟にセラはひとさし指で、会場の方に指を指すが。

「困ってる人が居たら、助けるのが当然だろ!!?」
「……」

セラの方に顔を向けてそう言うと、セラは少し顔を赤くして黙って着いて来る。

(なっ 何?この胸を締め付ける感じもしかして『恋』?でも、相手は子供?幾ら何でも歳だつて離れているし、いやでも恋愛に年齢は関係無いって知り合いも言っていたし、例え人間でも私の眷属にすれば良い訳だし♪)

何かよからんことでも考えているようだが、まあ知り合いの所へ送ったら透かさず立ち去ろう。

辺りを見回しても人混みは変わらず、セラに知り合いの顔や特徴を聞きながら探すこ

と1時間、とりあえずベンチで休憩。

「フウー 流石にこの人集り相手に探すの骨だな……。」

「ごめんねえ……元はと言えば私の不注意でこうなったのに……。」

あからさまに落ち込んでいるセラに、何て返せばいいか分からずにいるとさつきまで人集りだったが、いつの間にか周りには人っ子一人居なくなっていたんで、俺はセラにも人がいないことを告げる。

「一体、どういうことだ？」

「あれ？これって、まさか!？」

動揺していると突然、黒い霧が実現しその中から蝙蝠の羽を生やした悪魔の軍勢が現れ、その中の一人がこつちを見て喋った。

「セラフォール・レビアタンよ！ 我らは旧魔王派の者だ！ 新魔王派の魔王である貴様には、ここで死んでもらうからな！」

(.....)

魔王ってセラが悪魔！何ってことだ！ 寄りにも寄って悪魔と行動をとにもするとは！
だが旧と新て何だ？

「あのさ？ 状況が良く呑み込めないんだがセラって悪魔なの？」

「ええ、別に信じてもらおうつもりは無いけれど、私達悪魔は存在しているし天使や墮天使と3つの勢力、これを三大勢力と言わずと唾いがみ合っているんだけど、悪魔の中には『戦いを好む』旧魔王派と『戦いを好まない』新魔王派に別れているのよ！」

旧と新か！悪魔の世界も一枚岩でないわけか？セラが長々と解説してくれているが旧の奴等が睨みを効かせた。

「おい、ガキ！ 悪いがお前にもここで死んで貰うからな！ 我等の行動を知った者は例え子供でも生かしてはおかないのな!!？」

知ったって自分等で喋った癖に！ そして、セラは俺を後ろへ隠し自分が前へ出て庇

おう。

「一誠くん……ごめんね……。私のせいでこんなことに巻き込んだりして……。」

なんだ!?!随分、しおらしいじゃないか?戦いを好まない悪魔という者は皆こうなのか?そもそも人間も良い人ばかりではない、異世界にも良き心を持った者や悪い心むしほに蝕むしばまれた者もいたからな。結局、誰が正しくて誰が間違いかなどハッキリした事は言えないわけか。心の中でそう思っていると。

「ガキイ——!!?」 無視してんじやねえぞーコラー!!?」

「まあ、人間なんて俺達悪魔からすれば下等種族でしかない。殺したとしても何も問題無いがな!?!?」

「(「(「ギャハハハハハハハ!!?」(「(「(」

うるせえー奴等だな……仕方ない相手してやるか! これだけの人数なら『忍者の異世界』で手に入れたあの眼の力を使ってみるか!

「ち ちよつと、なんで前に出るの？ 私の後ろに隠れてないか？」

「セラいやセラッチ！ あんたが悪魔だった事は少しシヨックだったが、俺もセラッチに隠していた事があるんだ！ だから、これでお相子だ！」

「隠し事？」

回れ右でセラッチにニコツと笑い謝罪してから前方の軍勢の方へ向き直して、両目を一度閉じて再び開くと両目は真つ赤な瞳をし、黒い勾玉が3つ画かれ次第に模様が変わり身体から異様なオーラが纏い、その中から骨格や骸骨の骨などが現れ鎧のように身体を包んでいく。

「な 何なんだ！ それは？」

「これか！ これは俺が異世界で手に入れて来た友と同士によつて、実現した偉大なる力『須佐能乎』だ！」

「異世界？」

セラッチは俺の漏らした言葉が理解出来ないようだが、まあそれで良い、いちいち説明してられないからな！

「何を訳の分からんことをどうせ死ぬんだ！ 覚悟しろ!!」
ヒュンツ!!

悪魔の軍勢が一斉に襲い掛かるが、スサノオの手に握られた燃え盛る剣で薙ぎ祓うと、旧魔王派の軍勢の半分が消滅し消え流石の悪魔共も恐怖に苛まれ狼狽える。

〔き 貴様!!? 一体何者だー!!?〕

「悪魔のオジサン達、人間だからと言って甘く見ない方が良いつてこともあるよ！自分達が悪魔で人間なら弱くて当たり前だと思っていると、今のようになみついた野良犬の尾が狼の尾であつたということにもなりかねない!!?」

脳みそ軽量でも目の前の状況を見れば理解出来るだろうが。

〔言わせておけば人間風情が——!!?〕

あくあく折角、逃げるチャンスをあげたのに馬鹿には理解出来なかつたか!!?。

ザツシユツン!!?

呆気なく旧魔王派の悪魔の軍勢は塵になり倒され、スサノオを解除しセラツチの所へ戻る。

「大丈夫か？」

「ええ………一誠くんって………本当に何者？」

心配して歩み寄るとセラツチ腰が抜けた状態で、顔を卑屈ヒクツツカさせていた無理もない。あんな出鱈目な方に動揺するなという方が無理がある。まずは落ち着かせようとセラツチに近づこうとすると。

「セラフオール様！ 御無事ですか!？」

いきなり横から又、蝙蝠の羽を生やした悪魔が飛んで来て魔方陣の中から多数の兵が召喚された。

「チツ まだ残っていたか！」

向かって来る悪魔共に視線を移して、構える俺にセラッチが話し掛けるが。

「ま 待って一誠くん！ 違うのあの…『セラッチ！』…！」

「俺が奴等を引き付ける。その隙に、どこかに隠れるんだ！ 心配するな俺はあんな奴等に殺られたりはしないから!!？」

「待って!!？」

心配させまいと拳で胸を叩いて宣言すると、セラッチは手を掴んで真っ直ぐ俺の顔を見よう。

「一誠くん……じゃなくてイツちゃんって呼ばせて!!？」

突然、何を言い出すのかと思えば？

「…………セラッチ？」

「私、本気だからね！イツちゃんと出会った時から運命を感じていたの！だから、又会えるよね！！？」

両手で俺の右手を掴むセラッチの目は真剣そのものだった。そして、俺もセラッチの手に左手を重ねた。

「ああ！また会える日を楽しみにしているよ！」

そう言うとセラッチはスーツと手を放して下を向き、俺は再びスサノオを出して悪魔の大群を迎え撃ち注意を引き付けその場を去った。

〈一誠side out〉

〈セラフオルーside〉

イツちゃんと別れを告げて、呆然となっていた私に御付の子が歩み寄って来たわ。

「セラフオルー様！御無事ですか？申し訳ありません。旧魔王派の残党の気配を追って来ましたが、あのよう者がいたというのは確認出来なかったもので。」

「……違うよ。あの子は私を助けてくれた恩人なの。」

私の言ったことが理解出来なくて順をおって説明すると。

「……で、ではあの少年はたった一人で、旧魔王派の軍勢を倒したということですか？」
「そうだよ♪」

「ご機嫌で話し終わると今度は御付の子が。」

「でしたら何故、眷属にスカウトしなかったのですか？ それだけの力の持ち主ならセラフオール様は魔王ですよ？」

「ええ、そうね。でもいいの♪」

御付の子は困惑しているけど彼は言った。又会いに来てくれるって。

〈セラフオールside ont〉

~~~~~

## グレイフィアとの出会い

空は紫、辺りは薄暗い森の中、周りには目付きの悪い狼の群れがこちらを見ている。  
一誠は今冥界の森の中にいた。

〈一誠 side〉

俺は冥界に来ていた。それは以前、魔王である一人の少女の出会いが切っ掛けであった。彼女との出会いで、それまで見ていた悪魔への視線が変わり、悪魔の中にも解り合える者が居れば、人間とも共存出来るかもしれないと思っただからだ。辺りにいる狼の群れを薙ぎ倒して先へ進と横から悲鳴が聞こえてきた。

「んーう 確かに、今悲鳴が聞こえたようなの？」

覇気で周りの気配を探り位置を確認しつつも、場所を特定し走り出すと数名の悪魔に囲まれた銀色の髪をして服がボロボロになって座り込んだ一人のメイドがいた。

「ハハハハハ ついに追い詰めたぞ！」

「わ 私をどうするつもりですか？」

「知れたことを聞くな！お前ら旧魔王の血を引いている者には死んでもらうのさ！」

旧魔王だと！ それはつまりメイドは旧魔王派か？ だとすると俺が出る幕は無いようだなと立ち去ろうとしたとき。

「ただ、その前に！」

ガシツ！ ビリツビリツビリツビリツ！！？

「キヤアアア——！！？」

いきなり、悪魔の一人がメイドの服を掴んで、破り捨てメイドは悲鳴を上げるが、悪魔共はニヤニヤと笑っていた。

「見た時から分かっていたが、いい身体をしているなアンタ！」

「全くだ!!? 殺してしまうのが、勿体無いくらいだ!!?」

「すまんがどうせ死ぬんなら、俺達の精処理を手伝ってからにしてくれよ！」

「くう???」

悪魔共はニヤ付きながら必死に身体を隠しながら震えるメイドに近づくが、メイドの目は悪魔共を睨み付けるが、その瞳の奥には静かなる闘志があるような気がしてならなかった。

ドツカ!!?

「な 何者だー!!?」

気が付くと俺は悪魔共を蹴散らして、銀髪のメイドの前にいた。

「……ガ ガキ！」

「えっ? こ 子供？」



俺の姿に驚く悪魔とメイドは、思考が停止したように困惑するが徐々に俺に意識を向ける。

「おい、ガキ!!? 大人の事情に首を突っ込むもんじゃねえぞ!!? さつさと失せな!!?」

「そうだ!!? ぶち殺すぞー!!? ガキイー!!?」

「何をしているの?……早く逃げなさい?……。」

完全に舐めきっている悪魔に俺を心配するメイドだが、これは考えるまでも無いな。

「オジサン達。寄って集って女性を苛めるのは良くないよ! 悪魔の誇りがあるなら、正当なやり方にしなよ!」

「はあく正当も何も我等、新魔王派が正しいに決まっているではないか! 旧魔王派は自分達が魔王の血を引いているというだけで自分も魔王と言い張る始末だ。新魔王の方々は最早、戦いも戦争も無意味だと判断された。これのどこが正しくないと言うのだ!」

自信たっぷり新魔王の言い文を威張り散らす。

「だからって、メイド一人を持って遊んだ挙げ句に、殺していい理由にはならんだろう。」

「うるせえー!!?」 新魔王派の我等が正しいのだ!!?」

「「「「そうだ!!?」」」」

その言葉に愕然となった。所詮、新も旧も悪魔だから期待するだけ無駄というわけか。危険をおかしてまで態々こんな所まで来たというのに。悪魔共は本性を剥き出しにして襲い掛かって来た。それなら、容赦はせん!

「ハア——!!?」 龍—神—丸——!!?」

グウオオオオオオオオオオ!!

俺は異空間の中から一本の日本刀を取り出した。それは進歩界の異世界で託された『刀竜剣』だが、こちらの世界に持って来てしばらくすると西洋の剣から日本刀に姿を変えたのだ。そして、剣を天に掲げ叫ぶと金色の刀身から一筋の光の柱が天に登り空が急に暗くなり、雲から金色の黄金の東洋の龍が姿を現し、光の柱を中心に龍がうねり

降りてくると龍に飲み込まれ、光に包まれると白と赤と青の鎧を纏い、金と赤の甲冑を被った龍神丸の姿に変身した。

「な 何なんだ、その姿は？」

「[[[[[. . . . .]]]]]

変身した俺の姿を見て、悪魔共は動揺を隠せずにいた。

「形勢逆転かな？」

「た 只の虚仮威しであろう！ そのようなはつたり騙される我々ではない…:…:かかれ!!?。」

動揺はしたものの直ぐ様、正気を取り戻って襲いかかるが、俺は手の平の中から赤い勾玉を出して叫んだ。

「超力変身！ 獅子龍神丸！」

突如、緑の髪をなびかせた光の獅子の星神が現れ、光とともに包まれ鎧が金色に輝いた。

「超力！ 獅子光龍拳！」

光の獅子の星神の力『獅子光龍拳』を放ち、悪魔共は灰と化した。一人はギリギリで交わすがダメージはあるようだ。

「貴様ー！ こんなことをして、ただで済むと思うなよー!!？」

「ただで済まないのは、お前なんだよ!!？」

仲間を灰にされた事を恨みわめき散らす。俺は容赦しない。鎧が元に戻り刀竜剣を両手で持ち上げ飛び上がり。

「必・サーツ！ 刀・竜・剣ー!!？」

一撃必殺の技により悪魔は真つ二つになり吹き飛んだ。そして、残った銀髪のメイ

ドの所に行った。

「大丈夫か？」

「……………あ はい、助かりました……………」

助かったもののメイドの表情は沈んだままだった。

「あまり、元気がないようだが怪我が痛むのか？」

「いえ そうではないのですが申し遅れました。私はグレイフィア・ルキフグスと申します。」

メイドは自己紹介を始めるので俺も名乗るか。

「俺の名は戦辺一誠だ！」

「い 一誠、戦辺一誠様ですね。」

随分、礼儀正しいメイドだな。 悪魔連中は口が悪いと思っていたが中には敬語を使

う奴もいるんだな。

「別に『様』は付ける必要はないぞ!!?」

「いえ 一誠様は私を助けていただいた恩がありますから!」

恩ねえくまあいいか。さて、事情を聞くのでしょうか。

「グレイフィアとか言ったな。お前は何であいつらに襲われてたんだ?」

「はい……それは……」

グレイフィアは包み隠さず話した。自分が旧魔王派の血族である事、自分には姉と弟がいるという事、特にグレイフィアの姉は自分より優秀で誰からも慕われ両親や周りの人達は、姉と比較し自分の存在を認めてくれなかったそうだ。挙げ句の果てには弟ですら自分よりも姉がいいそうだ。

「私には……何処にも……居場所が無いのです……グスッ」

グレイファイアは自分の言い分を晒すと泣きじやくる。俺は目の前のグレイファイアにかつての自分を見ているような気がする。俺も昔は兄と比べられ親や周りから比較され、あるいは疎まれて育った事を自分の存在を誰かに見て欲しいかつた認めてもらいたかつた。そんな事を考えていると『忍者の異世界』で出会った友の事を思い出した。『絶対に！周りに自分の存在を認めさせてやろうぜ！』と友から言われた大切な言葉だと今でも忘れたことはなかつた。

「グレイファイアと言ったな！お前、俺に着いて来る気はあるか？」

「え？」

突然の言葉に理解出来ないようなので、説明を付け加えた。

「このままで、悔しくはないのか？ 自分という存在を誰かに認めさせたくはないのか？」

「？」

「ですが、私には何も無いうえに、特別な力も無く自慢できるようなものもありませんか？」

「……。」

俺の質問に悲しげな表情で答えるグレイフィアに。

「俺がお前に力を授ける!!? とは言っても修行して訓練もする上に簡単では無いがな。」

「ほっ………本当に私に!!?」

自分にあてられた言葉に、その瞳から涙を流すグレイフィアはこちらを見ながら答える。

「本当だし冗談でもない! さあ、行くぞ! グズグズしてる余裕は無いんだぞ!!?」  
「は はい!!?」

初めて自分のことを見てくれたことが嬉しかったのかは分からないが、グレイフィアは涙をぬぐって差し出す俺の手を取り走り出す。



ここから物語が始まると、一誠は薄々と感じ取っていた。

つづく

## 閑話

自分の世界の状況や仕組みなどがある程度知った一誠は、グレイファイアからの話で悪魔世界の事情や天使や墮天使のことを思い知らされ、いつか向こうから牙を向いて来るのではないかと思ひ、このままではと悟り、それに対抗する組織を創ろうと決意を固め、再び異世界へ旅立ち組織創りに協力してくれそうな人材を探す事にした。

「魔導兵器と呼ばれる侵略者が世界を襲う異世界」で、人類は女性が殆んどで反撃の時を伺い、侵略者への対抗手段としてパワードスーツ・魔導装甲（ハート・ハイブリッド・ギア）を開発した。戦略防衛学園アタクシアに通う女子生徒で彼女たちが装着する魔導装甲の能力は、飛行能力や攻撃武装を持ち魔導兵器と同等に戦えるようになっていたようだが、扱うのが人間で敵は強者な上に敵は戦い方や戦略を熟知しているため蟻が象に挑むようなものだった。そこへ、一誠はやって来て人々に戦闘訓練を詰ませ、戦略の軍師を教育し周りの者達と共に、敵と戦い長きに渡る戦いに人類は勝利を収めた。そして、一番の功労者の一誠は人々から称えられ、別の異世界へ旅立つと言ひ出したら、彼に付いて行こうという者達もいた。

【謎の生命体の襲撃を受ける異世界】。対抗手段は未知の鉱石から造られた強化鎧装キョウカガイソウハンドレッドだった。ある事情からハンドレッドの使い手たる武芸者（スレイヤー）を育成する機関・海上学園都市リトルガーデンで、人々は戦いへと身を投じていく。そんな時に一誠は現れ、その世界の状況や事情を教えてもらい共に協力させて欲しいと願い、今まで行つた異世界の中で文明は高レベルな世界だと評価し、彼は異世界の人に自分の世界のこと他にも別の世界があると話した、信じる者笑つて冗談に思う者もいたが、人と触れ合い仲良くなる事の楽しさは異世界だろうと異次元だろうと変わらぬ気がした。謎の生命体との長い戦いは、ついに終止符を打ち世界に平和が戻り、一誠は今までの事を振り返りたくさんのものを得たのだ。教えるだけではなく、その度にかを得ることの大切さを知り、全ての人を信じるのではなく信じられる者信じてはいけない者の区別をし考え行動する事を胸に、今こそやるべきだと思ひ組織名が頭に過り、自分の世界に帰還すると別れを告げるが、一誠と離れたくない者や彼は慕う者も一緒に連れていくことになった。

そうして、一誠は自分の世界に戻り父イザナギ母イザナミに異世界と交流し、この世界で皆が協力出来る組織創りに協力してほしいと頼んだ。傍から見ると夢物語に聞こ

えるが一誠の眼は真劍そのものであった。イザナギもイザナミもお互いに顔を合わせ、ついに『わかった』と言ってくれたのだ。

それから、いろいろあったがたくさんの人達とも出会い、戦争地域の貧民街や生活の為に親に売られた子供を保護し、アジアの内戦で家を焼かれた人々や飢えに苦しむ者達と共に組織を創った。【異世界との共和ができる他種族共成機密機関】である。異世界の魔法や能力を持ちいれば、病気などで苦しむ人々を救えると考えていたのだ。回復薬や魔法で治らない病気も治せるから、生れつき体が弱かったり生きたくて生きられない人々をイヤという程見て来た一誠は、異世界の知識や科学者なら人間の体を良くしてくれるのではないかと考えていたのだ。こうして組織を拡大し世界だけでなく異世界にも支部を設けることにも成功し、闇の世界や裏の奴等からも敵視されているが、それにはちゃんとした対策用の人材や隠密も完備し、悪魔や墮天使のスパイからも洗脳や催眠で二重スパイにして、情報が漏れないよう万全なガードを固めていた。時間は経ち組織は世界各地に支部を設けて、砂漠の地下や雲の上にも外部から見えないように魔法で境界を展開した移動要塞を設立した。人員も自分の世界だけではなく、異世界から連れて来たエルフやドワーフに科学者や他にも多数の異世界人を招いた。そして、皆はこの世界の料理や酒、文化や学門に興味を覚え気に入っているようなのだ。特にドワーフは

ビールが大好きで、刀や日本の鎧に心奪われまくりであった。エルフ達はワインや日本酒の虜になりアウトドアやキャンプ道具などに興味がわき勉強し始めた。豚頭族<sup>オグ</sup>、蜥蜴族<sup>リザードマン</sup>、大鬼族<sup>オオガ</sup>、猫族、鳥獣族、牙狼族様々な種族が移住して来て、知識や文化を覚え頼れる労力に変わって来た。こちらの世界の一誠からすれば、それほどではないことばかりだが、皆が楽しんでくれるのなら、彼は満足だった。

つづく